# 薬学生NEWS
information magazine for pharmacy students

No.9　2013年2月25日発行

発行：公益社団法人 日本薬剤師会　発行人：児玉 孝
〒160-8389 東京都新宿区四谷3-3-1
富士・国保連ビル7F
TEL 03（3353）1170　gaku@nichiyaku.or.jp


# 第24回 FAPA学術大会がバリ島にて盛会に開催

## 日本からも多数の薬学生が参加

開会式におけるアトラクション

第24回FAPA（アジア薬剤師会連合）学術大会が、2012年9月13日（木）～16日（日）にかけ、インドネシアのバリ島で開催され、日本からも多くの薬剤師・薬学生等が参加し、アジア諸国の薬事事情等について学ぶと共に、各国の薬剤師や薬学生と交流を深めました。

本学術大会は、2年に1度FAPAに加盟するアジア各国の都市で開催されるもので、毎回アジア各国の薬剤師・研究者・薬学生等が集い、様々なテーマに基づくシンポジウムや研究発表が行われます。更に今回の大会では、薬学生向けに様々なプログラムが実施されました。

本会では、国際的視野をもった薬剤師の育成との趣旨から、前回の台北大会（2010年）より、薬学生・若手薬剤師を対象にした大会参加に係る補助事業を行っております。今回は、本補助事業を活用し、薬学生については19名が、若手薬剤師については4名が全国から参加しました。本号では、薬学生による参加レポートの一部を掲載しております。是非ご一読ください。

学生プログラムでの1コマ

＊次回FAPA学術大会は、2014年10月にマレーシア・コタキナバルで開催予定です。
＊本号のFAPA学術大会に関する写真は、大会に参加した薬学生及び本会関係者より提供頂いたものを使用しています。
＊本ニュースでは、紙面の都合上、提供頂いたレポートのうちの一部を掲載いたしました。全レポートにつきましては、日薬雑誌2月号に掲載しておりますので、ご参照ください。

### 薬学生NEWS No.9 CONTENTS


第24回 FAPA学術大会に参加して
石破佳永子さん（東京理科大学薬学部4年）…… 2p
河邉伊万里さん（城西国際大学薬学部5年）…… 2～3p
川口真依さん（慶應義塾大学薬学部3年）…… 3～4p
佐方一生さん（昭和薬科大学3年）…… 4p
島田隆行さん（立命館大学薬学部4年）…… 4～5p
村上紘之さん（京都大学薬学部4年）…… 5～6p
岡野卓也さん（神戸薬科大学6年）…… 6～7p
樋口雄一郎さん（第一薬科大学3年）…… 7p
日本薬学生連盟九州支部立ち上げイベントを開催！ …… 8p
8月に千葉でAPPSが開催 …… 8p

# FAPA学術大会に参加して

**石破佳永子**
東京理科大学薬学部　4年

今回FAPAに参加した理由は、アジアの薬学の現状と、日本の薬学事情を学び、また、薬剤師の職能の場が日本より広く設けられている国の制度や、学生のありかたを学び取りたいと思ったからです。

また、今回FAPAに参加して、アジアの薬学生と沢山話す機会がありました。インドネシアでは、医師に対して薬剤師の数がかなり少ないことを知りました。また、薬剤師という職業も一般にはあまり知られていないということを知り、日本との違いに驚きました。

しかし、アジア全体の傾向として薬剤師の数は増加傾向にあり、薬剤師の数が足りなくて手が回らなかった仕事も今後は薬剤師の業務となっていくのではないかという話も聞くことができました。日本でも薬剤師の数は増加傾向にあり、薬剤師の業務も日々拡大しています。この点では、日本もアジアの他の国も変わらないのではないかと思いました。それぞれの国で制度や現状に差はあるものの、薬剤師として医療により貢献するために、お互いの国の課題を共有し、解決方法を共に探ることでよりよい未来が開けるのではないかと感じました。

2日目のFAPA Students' sessionでは、5つの講演を聞くことができました。どの講演も非常に興味深い内容でした。中でも最も印象に残っているのは公衆衛生のセッションです。このセッションの中で行われたスモールグループディスカッションでは、お互いの国で薬学生が思い浮かべる公衆衛生上の問題点を聞くことができました。私は感染症やタバコを思い浮かべていたのですが、話の中心となったのは偽薬についてと、薬剤師の業務内容を一般の人に知ってもらうということで、日本とアジアの他の国の置かれている環境の違いを実感しました。しかし、日本でも個人輸入の医薬品には偽薬問題があり、その問題を根底から解決するためにはアジアの国々の偽薬問題の解決も必要になってくるのではないかと思いました。

このセッションの最後に、FAPA Students Declarationにインドネシア、日本、台湾、フィリピン4カ国の学生とStudents' sessionの実行委員、FAPAの代表が署名しました。 その内容は以下の通りです。

**FAPA Students Declaration**

The student is the reader of today and the future. The Asian Health Development needs the young generation to be part of it. As the Asia Pacific Pharmaceutical students, we are declaring that students have important role on Asian Health Development and we can promote positive change by;

1. Enhancing students' participation in Pharmacy Education, including participation in teaching and learning, mentoring and student recruitment.
2. Enhancing students' role in Pharmaceutical development including research, approach, continuous excitement and friendly atmosphere and full devotion to science.
3. Enhancing students' on Public Health Pharmacy, including the application of pharmaceutical knowledge to the science and art of preventing disease, prolonging life, protecting and improving health through coordination.
4. Enhancing students' role on Professional Development through lifelong learning.

このセッションを通して、アジアの次世代を担う薬学生として、今後の学生生活において最大限のことを学び、日本や世界の薬学の発展に貢献できる人材になりたいと感じました。そして、いつか今回一緒にFAPAに参加した仲間たちとまた再会し、自分たちがこの学術大会の後に何を学びどう成長したか、そしてよりよい薬剤師の業務を行うにはどうしたらいいかを話し合えればと思います。私はまだ実務実習前なので、実際の薬剤師業務に関してはほとんど意見交換することができませんでした。もし次にこのような場に参加する機会があれば、日本の薬剤師の業務や制度についてもっと深く意見交換してみたいと思います。

今回のFAPAへの参加を通して、改めて英語力の不足を痛感しました。日本人以外の薬学生の話す英語は私にとっては速く、会話内容が理解できず悔しい思いをすることも少なくはありませんでした。また、学術大会全体を通して、日本人は素晴らしい研究をしているにも関わらず、ポスターや発言の数が少なかったように感じました。海外に日本の薬学をもっと発信していけるよう、日頃から学部で習う専門科目に加えて英語学習にも積極的に取り組んでいきたいと思いました。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えて下さり、また現地でも様々なサポートをして下さった日本薬剤師会の先生方にこの場をお借りして深くお礼申し上げます。

**河邉伊万里**
城西国際大学薬学部　5年

FAPAに参加し、最も印象に残った事は、9月16日に行われたフィールドトリップです。

フィールドトリップでは、現地の薬局や病院を見学できるのですが、この中で私は薬局見学に参加し、実際に自分の目で見て、

南国情緒あふれる大会会場（Bali Nusa Dua Convention Center）の外観

会場入口における民俗衣装での演奏

経験して、日本との違いに大きな衝撃を受けました。

薬局へ向かう途中「インドネシアの薬局ってどんなところだろう」と考え、伝統的な建物をモチーフに造られた薬局を想像していましたが、実際は日本のドラッグストアに近い部分がありました。

薬局は一階が店舗になっており、二階は病院との説明を受けました。患者さんは二階で医師からの診察を受け、一階に降りてきて薬局へ処方箋を持ってくるというのです。『薬局は患者が自由に選べる』日本とは違うと感じたと同時に、薬局の戦略であるとも受け取れました。

カウンター内の見学では、日本では原則調剤室に配置しなければならない処方せん医薬品がカウンター内に陳列されており、薬が残り少なくなると、表示を変えて、視覚的に残量が分かるようになっていました。カウンター内に陳列することで、患者さんに処方された薬の在庫が無い時は、実際に在庫が無いことを患者さんに示して調剤を断る事ができるそうです。日本では近隣の薬局に問い合わせをして処方薬を揃え、自分自身も薬局実務実習の時には他の薬局から問い合わせを受けて応対したので、この点においても日本と違うと感じました。

さらに、調剤棚の薬が入っている容器の左肩にはふせんが貼ってあり、使用期限別に色分けされていました。これも薬剤師が視覚的に使用期限を判断する上で役に立っていると感じました。

ところで、店内には日本と同じように一般用医薬品が販売されているのですが、見たことのない一般名の薬がありました。その時は自分の勉強不足を疑って一般名をメモして、帰国してから調べてみると、日本では40年前に使用されていた薬だということがわかりました。その理由は、新薬が高価なので購入出来ないとのことでした。

また、同じ薬局見学に参加し、情報交換した薬剤師の方の話では、インドネシアでは薬局自体が一部の裕福な人々しか利用出来ず、貧しい人たちは医師免許を持っているかも分からない医師に診断され、どんなに訴えても麻薬を渡されて、患者さんや家族自身もよく分からないまま患者さんが亡くなっていくそうです。さらに驚いたことに薬局で販売されているクリーム一本分の値段が一日分の食費になるとの情報もいただきました。現地の薬局見学からインドネシアの社会的背景や貧富の差にも驚かされました。

このような体験を通じて、日本に居るだけでは考えもしなかった事を考えることが出来ました。また、バリ島に行く機会はこの先またあるかも知れませんが、現地の薬局を見学する機会はまず無いと思います。このような点をふまえましても、とても貴重な経験になりました。

## 川口真依

慶應義塾大学薬学部　3年

私にとって今回のFAPAの参加が初めての国際学会の参加となりました。何の予備知識もなく不安だらけのまま現地入りしましたが、会場に到着すると同じような境遇の薬学生や薬剤師の方がアジア各国から足を運んでいて、同じ薬学を学んでいる立場として安心感を得たのを覚えています。

FAPA期間中には様々なトピックのシンポジウムが行われていて自分の焦点をどこに向けていくかについて悩みましたが、今の自分に一番身近な、薬学教育と関係するような講演を中心に足を運びました。

その中でも一番印象に残っているのは、FAPAに参加している学生向けに行われたStudent Sessionでの講演です。開催国のインドネシアの先生に限らず、アメリカやオーストラリアの教授の方のお話が聞ける特別な機会が得られたことはFAPAのような国際会議であるからと考えます。

Alan Lau 教授による“Student participation in pharmacy education”ではUniversity of Illinois Pharmacyが取り上げられていて、アメリカでの薬学教育について理解することができました。そのなかでも感心したのは、アメリカの薬学教育では生徒が教育そのものに参加する事がACPEで義務付けられていることでした。生徒は、生徒会のような生徒だけで構成されている組織に所属し、その一員として教育に対する意見を直接教員に述べる事が出来るため、授業の改善が迅速にかつ的確に行うことが出来るそうです。その結果皆が満足できるような教育を受けることが出来るのだと感じました。この話を聞いて日本の薬学教育と比べると、日本の教育システムの方が受動的でありアメリカは自発的なことは明らかでした。現代では、薬剤師の自発性やリーダーシップが重要だと位置づけられています。FAPAの代表のJohn Chang氏の”Leadership”の講演でも薬剤師の立場から日本の医療を変えるために重責を担うべきであると強調されていました。その為には、コミュニケーション力、認識力、影響力を兼ね備えて人に影響を与え続ける事で、皆が同じビジョンを持って取り組めるように引っ張っていくリーダーとならなければいけないそうです。日本で薬学を学んでいると狭いコミュニティーに閉じこもってしまう傾向にある為、その3つの力を養うために重要な広い視野を持ち続ける事は難しいと現在感じています。そこでFAPAのような国際会議に参加して新しい知識をつける事と共に、国際交流で視野を広げることが重要だと感じました。

最後に、私がFAPA参加の経験で得た教訓は、言語の壁だけで世界を知る事を辞める事や恐れる事はしてはならないことです。国際会議では英語が中心の言語の中、日本では英語ができる人は特別と称されることが殆どですが、海外では英語はできて当たり前の世界だと今回改めて感じました。会話の中でうまく意見が伝わらない時、一般的に日本人は自分の語学力が原因だとへりくだって謝罪しますが、自分を信じて躊躇せずに伝えようとする意識があれば相手と通じ合うことが出来ると私は考えます。言語に関わらず会話から存在感のある人がリーダーに最適な存在であり、世界的に”チェンジ”を起こすキーパーソンになれるのでは

開会式におけるFAPA石館賞授与式での1コマ
※開会式では毎回本賞の授与式が行われ、薬学研究・薬学教育等の各分野で、優れた功績を残した者に賞が授与される。賞の名称は、その創設に深く関わり、FAPA元会長で本会19代会長でもあった石館守三（イシダテ モリゾウ）氏にちなんでのもの。

児玉会長（写真左）及び本会関係者と薬学生達との集合写真
※日本から参加した薬学生・若手薬剤師と本会関係者との親睦を深めるため、本会主催で情報交換会を開催した。

ないでしょうか。私も将来薬学という分野の中でそのようなリーダーになり、平等により良い医療を提供できるような世界を造ることに貢献したいです。FAPAに参加した事で、薬剤師として必要な知識と共に人間性について新しい視野を得ることが出来ました。5年次に行われる実務実習では今回得たことを踏まえて患者さんに慕われるような人間性を兼ね備えた薬剤師の卵として、確実で安心できる医療と健康を提供することに取り組みたいです。また、この機会で得た繋がりも大切にして常に世界に目を向けていたいです。

## 佐方一生

昭和薬科大学　3年

今回私がFAPAに出席し、一番関心をもったシンポジウムはLeadership in youです。話はこの題名の通りリーダーシップとはどういうものなのか？またリーダーシップというのは絶対に欠かせないものだということを教えてくださったシンポジウムです。

私が今まで読んだ本で、次のような文章がありました。それは「現代の若者に出世欲がないのは自然の流れである。今の世の中では、少しでも問題が起これば責任を追及される。それは停職、給料の削減、辞職と様々なものがあるが、これは当然誰しもが回避したいものであるのは間違いない。その責任から逃れるために出世しないという選択をする最近の若者はむしろ賢いと私は思う」というものです。私はこの文章を読んだ時、強く共感したことを今でも覚えています。現に最近問題になっている内科や外科の医者が少なくなっているというのは、そんな若者の思考を顕著に表している問題だと思いますし、他にもそのような問題は多くみられます。

しかし今回のシンポジウムはその本とは全く異なり、リーダーシップというものが薬剤師にとっていかに大切なものなのかを教えてくださったシンポジウムです。その中で特に印象に残っているフレーズが2つあります。

1つ目はLeader is inspiring people towards achieving goals!! というフレーズです。今まで私はリーダーというものをこのように捉えたことはありませんでした。しかし言われてみるとリーダーには必要不可欠な能力のように思います。リーダーはただただ人の上に立ち、指示し、組織や会社を引っ張っていくだけではなく、そのような経緯の果てについてきてくれる人達を成長させなくてはいけないのだと気づかされました。このフレーズは言い換えるなら、リーダーは人々のモチベーションを高める存在だということもできると思います。これは言葉でいうほど簡単なことではないはずです。しかし、そのようなことができるからこそリーダーであり、それほどリーダーという立場は重要なものなのだと私は思いました。逆にリーダーシップを持っていないリーダーでは、組織は衰退する一方でしょう。今回このフレーズはリーダーシップというのがいかに必要なものなのか、またそれは自分も絶対に身に付けなくてはならないものだということを教えてくれたフレーズでした。

2つ目のフレーズはLeadership is a power. Power is influence. Influence has a successful visionです。つまり成功するためのビジョンをみるためには、根本的にリーダーシップが必要だということです。今の社会では、多くの人は会社の規制、世の中の法律、その他様々な規律やルールといったものに従って、更に時には縛られて働いています。そのような世の中で、不満を感じることや自分の望むようなことが出来ない場面に直面することは何度もあるでしょう。しかしそのような時、自分が上に立つ人物であり、かつリーダーシップのある人間でなければ自分の望むことや正しいと信じることは貫き通せません。また同時に、規則等の縛りを変えることもできません。将来薬剤師になる以上、私達学生はそれぞれの理想とする薬剤師像があり、その未来に向かって今現在誰もが勉学に励んでいることと私は思います。しかし今の世の中では、自分の持っている理想像を叶えられた薬剤師というのは本当に一握りの方だけだと私は思います。リーダーシップというのは、もっともっと多くの人が自分の理想像を叶えるために必要な能力だと学びました。そして私自身もその能力をぜひ身に付けたいです。それはもちろん自分の望む薬剤師になるためです。そのために今まで以上に勉学に励み、大学では学べないような知識や技能もどんどん身に付けていきたいです。リーダーシップはその1つであり、言い換えればリーダーシップだけでなく、自らが必要だと感じたものはどんどん自分のものにしていきたいです。

今回は1つのシンポジウムについて報告書を書きましたが、今回のFAPAではここに書ききれないほど多くの経験をすることができました。なによりこのような素敵な機会を学生のうちに体験できたというのは私にとってとても大きな財産です。この経験が今後の私の大学生活に大きな刺激を与えることは間違いありません。

今回このような素敵な機会を与えてくださった方々に心から感謝申し上げます。

## 島田隆行

立命館大学薬学部　4年

2012/9/13~9/15にてインドネシアのバリで開催されたFAPA Congressに参加しました。FAPAはアジア薬剤師連合の略称であり、その名の通りアジア圏における薬剤師や薬学生が所属し、この大会は薬局や病院、大学機関での研究において新たな知見を発表する場であり、交流する場でもあります。そして、その交流は自ずと国際交流となるため、英語は必須のコミュニケーションツールとなります。今回得られた貴重な経験は英会話能力を向上させただけではなく、薬学教育における国際交流の必要性、また各国の文化背景を知るツールとして活用できる伝統医療学習の面白さを知ることができました。そして、このような貴重な機会を与えてくださった皆様に心から感謝しています。

多くの薬学生にも感銘を与えた、FAPA会長John C P Chang氏のリーダーシップに関する力強い講演

Students' Session後の各国薬学生揃っての集合写真。
※今回の大会では、様々な薬学生向けプログラムが実施された。

私は以前からインドネシアの伝統医療であるJamuについて興味がありました。今回のFAPA Congressでのメインテーマが『伝統医療を現代社会に』ということもありそれに関連したシンポジウムに参加しました。シンポジウムでは主にJamuが現在抱えている問題点とこれからの改善点についての発表でした。これは、伝統医療としてのJamuが現代医療の代替医療として国を挙げた利用がされるなか、有効性や安全性についての科学的根拠が欠けていることが問題点として挙げられていました。そして、科学的研究はインドのアユルベーダや中国の中医学に流れをもつJamuが共通の慢性疾患への有効性を持っているかを確かめるためのツールであることを述べられていました。

発表はシンポジウムだけではなく、ポスターもありました。ポスターには各国の地域医療における薬局の在り方などを研究されているポスターやマラリアやフィラリア駆除のための基礎研究、熱帯植物を利用した医薬品や化粧品開発についてのポスターなど、幅広い分野での発表が行われており、多くの知識を学ぶことができました。

地域医療における薬局の在り方の研究は台北と東京において行われたOTC薬品とセルフメディケーションについて消費者がどのように考えているかの研究でした。なかには、OTCを利用したセルフメディケーションを利用する理由についての項目があり、東京と台北も同程度の割合で ”小さい傷や軽い病気を患ったこと” や ”薬局の便利さ” などがありました。ここで、驚いたことは ”薬剤師さんから特別な助言が得られるから” という項目について日本では約7%がYESと答え、台北では約5倍の35%がYESと答えていたということです。バリに来て日本では薬剤師としての職能が消費者に周知されておらず、まだまだ生かされていないということを知りました。熱帯植物を利用した研究についてのポスターでは、アボカドの種やスイカを利用した化粧品開発など熱帯アジア圏ならではの雰囲気を感じ取ることができました。

また、日本からの発表の多くは地震や津波における災害医療においての薬剤師の役割について紹介されたものであり、救援物資の医薬品を分別する作業や衛生管理やお薬手帳などの管理が主な業務として挙げられていた。

私たちはポスターやシンポジウムに参加して様々な知識を得たばかりでなく、アジアの多くの薬学生と交流することができ、各国での薬剤師のこれからの在り方について語り合うことができました。この経験を活かして、国際社会に通用する薬剤師となりたいと思いました。

## 村上紘之

京都大学薬学部　4年

FAPA、国際学会、他大学の薬学生同士の集まり、いずれも初めての経験であった。入ってくる情報全てが刺激的で、3日間途絶えることなく脳の活性化状態が続いた。当報告書では、数ある興味深かったトピックの中から、薬学生プログラムにて取り上げられた「これからの薬剤師の役割」というトピックに関して報告する。

これからの薬剤師の役割として論じられていた事を私なりにまとめると、それは、病院や薬局といった位置にとどまるのではなく、地域コミュニティに対する「PUBLIC HEALTH」の推進者・アドバイザーとして、より多くの人が“患者”になるのを防ぐことである。通常、人は何か心身に異変を感じない限り病院には行かない。しかし、もうその時には既に“患者”になっており、治療の対象になってしまう事が往々にしてある。このままでは患者が減らないため、医療費は高騰し続け、社会保障制度の存続が危ぶまれる。基礎化学から臨床までの橋渡しができる薬剤師だからこそ知り得る情報や薬の危険性を適切に伝え、『健康相談はまず薬剤師へ』という認識を地域コミュニティに根付かせることがひとまずの目標である。

ここで、大きく3点の課題が生じてくる。

1点目は、健康の定義・指標の明確化である。現時点で、「健康とは？」という問い掛けを全国規模で行なった場合、果たしてその定義に対するコンセンサスが取れるであろうか。「なんとなく健康とはこういうことだろう」という認識はあるかもしれないが、具体的に「私はまさしく健康だ」と認識するためには、健康の定義を明確にした上で、栄養・生活環境・人間関係・物質的豊かさ等、適切な角度からの健康指標を基に健康を測る必要がある。また、コミュニティ、さらに言えば家族単位で状況が異なる。そのコミュニティを理解した上で、柔軟にアプローチを変えていかなければならない。

2点目は、行政やメディアとの提携である。市民団体としてキャンペーン運動を行うのではなく、あくまで業務として地域コミュニティの健康を促進しなければならない。そのためには、行政と共に制度を作り上げなければならない。さらにコミュニティの意識を高めるためには、様々な機関を巻き込んで方向性を明確にした上で、メディアを通じて周知を徹底していく必要がある。

3点目は、対価の設定である。健康を促進するといっても、その行動の対価が実際どれくらいのものか見えにくいところがある。この点に関しては、FAPA会長であるJohn C P Chang氏がうまく言い表していた。彼はこう話した。「君達は何故わざわざ高いスターバックスコーヒーに行くんだい？別にコーヒーなんてそこらの安い喫茶店で飲めるだろう？そう、君達はコーヒーそのものというより、スターバックスコーヒーのあの贅沢な空間であったり店員のサービスにお金を払っているんだよ。薬局もそうなればいいんだ。価値があると感じるものには人はお金を払う。」いわば、薬剤師は医薬品を含む健康促進という商品を提供する究極のサービス業でなければならない。薬局に行けば、健康になったと錯覚するぐらいの強いインパクトがあってもいいのかもしれない。

では、具体的に、薬剤師はどのような形で「PUBLIC HEALTH」の推進者・アドバイザーとなりうるのか。それこそ我々薬学生が考えていかなければならない事である。

開局部会の口頭発表で、日本の学校薬剤師制度について発表する日本からの参加者

ポスター発表会場の様子

まずは大学やセミナーの講義を聞くといった受身な体勢ではなく、どのような仕組みで社会が動いてて、現薬剤師がどのような気持ちで働いているのか、問題点は何か、自ら見聞きし考え突き詰めていくことから始める必要がある。さらに、今回のような多様な薬学生や薬剤師が集まるような機会に積極的に参加すれば、効果的なInteractive Discussionが可能である事に気がついた。文化や考え方が違うからこそ、相手の意見を素直に聞き、自分の率直な疑問や意見をぶつける。知りもしなかった制度や現場の声を聞き、自分の知識と混合させることで、新たな考え方が生まれ自分の進むべき道に明かりを灯し、学ぶべきキーポイントが見えてくる。Discussionが終われば、それらキーポイントに関する文献を調べるなどして、理解を深める。こうして、Interactive Discussionを継続する事が我々、受身に慣れすぎている学生にとって重要であり、「PUBLIC HEALTH」の推進者・アドバイザーとしての薬剤師の在り方を考える上で欠かせないものだと感じた。

最後に、FAPA2012を通じて、文化や土地柄の違いがありながらも関係なく通ずるGlobal Standardなるものの存在を再認識したと共に、アジアだけではあったが、国境を越えて共に薬剤師の進むべき方向に向かう大きな力を感じた。たった3日ではあったが、貴重な財産となった。機会を与えていただいた方々に深く感謝する。

## 岡野卓也

神戸薬科大学　6回生

2012年9月13日〜16日までインドネシア・バリ島で開催された、第24回FAPA学術大会に参加しました。本学会において発表の予定がないにもかかわらず、参加したいと思った理由としては、他のアジア諸国の薬剤師・研究者の発表を聞き、対話を行い、また現地の医療状況を自分の目で確認したい、そしてそこから刺激を受けたいと思ったからです。

本学会では演者のリモコンが作動しなくなったり、パワーポイントが動かなくなったり、停電で真っ暗になったり、プログラムが伸びて帰りの飛行機にギリギリになったり…日本の学会とは異なり多くのハプニングもありましたが、日本薬剤師会児玉会長をはじめ日本だけでなく各国の素晴らしい先生方とお話しさせて頂けたり、多くの興味深い発表を聴くことができ、本当に充実した毎日を送ることが出来ました。

最終日にはField tripという実地見学のプログラムがあり、私はサングラ国立総合病院を見学させて頂きました。その病院での見学が、私の中で一番興味深くまた考えさせられた出来事になりました。

学会が行われたリゾート地ヌサドゥアから車で約1時間、庶民の活気に満ち、バリの人々の生活感覚がそのまま映し出されているようなデンパサールという都市にその病院はありました。

患者さんはほとんどがバリに住んでいる人ですが、バリ島というリゾート地である土地柄、観光客も多く受診されるとのことで、そうしたことに対応出来る様に医師や看護師だけでなく薬剤師も英語が話せるようです。

病院内部を軽く説明して頂き、薬剤部へ…そこでは、日本の薬剤部では考えられない光景がありました。

- 普通薬と劇薬等リスクの高い薬が分けられずに棚に配置されている
  （日本であれば、劇薬であれば棚を分ける、施錠の必要なもの…等法律で定められている）
- 冷所保管のアンプル・バイアルは、抗がん剤等関係なしに全て一緒の冷蔵庫に保管されている
- 薬剤部内にクリーンベンチが無造作に置かれ、そこで輸液・抗がん剤調製を行う
  （日本であれば、輸液調製はクラス10000の無菌室内にさらに無菌度の高いクラス100のクリーンベンチを設置し、そのクリーンベンチ内で調製を行い、また抗がん剤調製はクラスII bタイプの安全キャビネット内で調製を行うことになっている。）
- 病院の薬を運ぶカートが、スーパーなどにあるカートである

対して調剤過誤を防止する工夫も見られました。

- 注意を要する薬に対しては、薬の棚の所にシールを貼り、調剤者の注意を喚起するといった工夫が見られた（例 危険度が高いもの：HIGH ALERTと書かれた赤いシール、外観類似薬：CAUTION LOOK-ALIKEと書かれた青いシール、毒性のもの：CYTOXICと書かれた紫のシール）
- 全自動錠剤包装機が導入されている（日本の病院や薬局では多く普及していますが、東南アジア諸国では病院でさえほとんど普及していないようです）

見学前、日本ではまだ行われていないことがあるのでは、日本人では考え付かないようなことを他国では行っているのではないかという期待感が私の中にはありました。何か見つけて、日本でも導入できることがあるなら導入する…しかし現実は日本の方が機械、リスクマネージメント、設備等全てにおいて上回っており、日本の薬剤師の環境は病院・薬局問わず本当に恵まれたものであると実感することになりました。また日本からもっとアジア諸国に日本の状況を発信していく重要性を感じ、もし導入できるものがあるならば導入して頂く…そうしてアジア諸国の薬剤師のレベルを上げていくことで、患者さんのQOLだけでなくFAPAでの更に活発な発表・議論等が期待できると考えました。

薬学教育6年制になった今日、ほとんどの薬学生が病院や薬局、企業等に就職します。対して私は、来春卒業後、大学院医学研究科に進学します。大学院での4年間では研究だけでなく臨床にも触れ続け、大学院卒業後は国内に止まらず国際的にも通用する薬剤師になりたいとの思いから進学を決意しました。

『日本は実験等何をするにしてもとても素晴らしい環境だ、こんな整った環境は母国では考えられない。素晴らしい環境で勉強

展示ブースの様子

見学会で地元薬局を訪問した際の様子
※大会最終日に、フィールドトリップと称する、地元の薬学部、薬局、病院等への見学会が実施された。地元はもちろんアジア各国の参加者と、薬事事情等について情報交換を行うい い機会でもある。

し研究成果を出すため日本に来た。』私が在籍する研究室のインドネシア人留学生は口を揃えてそう言います。確かにアジア諸国の中では、日本はトップクラスであると今回の学会でも再認識させられました。しかし、これからもその状態が続くとは私は思いません。日本がアジアに止まらず世界的にもトップクラスであるためには、このように他国の人に触れて刺激を受け、個々だけでなく全体で更なる努力をしていかなければならない、そうでなければすぐに他国に追い抜かれていくと思います。そのためには、刺激を受けた個人がリーダーとなって全体に影響させる必要があり、“国内に止まらず国際的にも通用する薬剤師”はそうした責務もあると私は考えます。

最後に、今回この様な貴重な機会を与えてくださった日本薬剤師会に感謝致します。また、現地においても様々な面から私たち学生をサポートして下さった薬剤師の先生方に御礼を申し上げます。有難うございました。

## 樋口雄一郎

第一薬科大学　3年

2012年9月13日から15日までの3日間バリ島にて第24回アジア薬剤師会連合学術大会（FAPA学術大会）が開催され、私は学生として参加しました。FAPAではアジア各国からの薬剤師や薬学生が参加していて、この大会で多くの人と交流ができ、とてもいい経験になりました。また以前の大会で知り合った薬剤師の方々とも再会でき、お話しをしてとても充実した時間を過ごすことが出来ました。FAPAの大会中に特に印象に残ったことは、日本からの薬剤師・薬学生のプレゼンテーション、フィールドトリップでのバリの伝統医療、そして学生向けに行われた演説です。

FAPAでの発表はいくつかのセクション（科学、生薬・薬局方、薬学教育、流通・社会経済薬学、病院・医療薬学、開業（地域）薬学など）に分かれており、それぞれのセクションで発表が同時に進行していました。その中の開業（地域）薬剤師の部門では、知人の薬剤師の方が学校薬剤師についてのプレゼンをしました。その方は薬局を経営されている薬剤師でありながら学校薬剤師も兼務していることから、他のアジアの国々から見ると珍しいケースなのではないかということで発表されました。説明にはスライドを用い、分かり易く解説されていました。日本の学校薬剤師の職務内容はプールや飲料水の水質検査及び設備検査、シックハウスの検査、採光の確認など様々で、その他生徒たちに対して禁煙の教育もあります。実際にプレゼンテーション後に来聴していた海外の方からいくつか質問があり、外国の薬剤師の方からすると興味のある内容だと感じました。また、城西国際大学の学生のポスタープレゼンテーションを傍聴しました。学生でありながら海外の他の薬剤師の先生たちの中に入って発表をしている姿にとても刺激を受けました。学校での授業やこの学会中でもそうですが、我々学生は受身になりがちで中々自発的に行動してこちら側の考えや情報を相手に提供することはほとんどありません。しかし彼女等は自分たちで発表内容を作り、日本の薬学生の実務実習に関するプレゼンをしていました。もしまた次回FAPAのような学術大会に参加する機会がありましたら、受身にだけにならず、日本の薬学生の観点から話題を取り入れた発表をしてみたいと思うきっかけとなりました。

今回のFAPAのテーマが‘Culture & Medicine’：Bringing Traditional Medicine to Modern Life（‘文化と医薬品’：伝統医学を現代社会に）でした。そのこともありフィールドトリップではインドネシアの伝統医療と薬局を見学に行きました。Univ Hindu Indonesia（UNHI）でAyurvedaやJamuについての講義を受けました。これらのインドネシアの伝統医療ではハーブなどを用いた薬草療法で、マッサージなどを行いながら患者さんを治療していくとのことでした。治療に対して患者さんの体の内面からのアプローチもあり、普段の生活の中では見ることが出来ない興味深い内容でした。

15日の朝9時から夕方5時まではStudents' Sessionが催されました。これはアジアやオーストラリアの薬剤師の諸先生方が交代でアジア各国の薬学生に対してプレゼンテーションをしてくれるものです。その中で印象に残ったのがオーストラリアからのRohan Elliott先生の『学問に対する専門性の追求』というプレゼンでした。専門性の追求は能力やパフォーマンスの維持や向上に重要な役割を果たしており、最も効率的な学習方法を見出し、今から生涯を通して学び続けていくことが重要だということでした。医療の分野は日々進んでいるため、薬剤師も医療従事者の一人としてその動きを感知し、より良い医療サービスを患者さんに提供していかなければいけないと思います。このことは、薬剤師になってからも生涯重要になる内容だと感じました。

大会初日の夜にはWelcome Dinner、2日目の夜にはMalaysian Night、学生にはCultural Night，3日目の夜にはGala Dinnerなどがあり、諸外国の薬剤師の方や薬学生と交流するチャンスがたくさんありました。短い期間でしたが、様々な国や地域の学生、薬剤師の方と交流できとても貴重な時間を過ごせました。今後は、このような海外で開催される学術大会に参加する良さを伝えていき、さらに学生の参加者が増えていって欲しいと思います。そして大切なのは参加するだけでなく、その場で学んだことを国内に持ち帰って周囲に伝え、実際に取り組んでいくということだと思います。このような国際交流や活動は、国際的な視野を持つ薬剤師育成に繋がるものであり、学んだことを基によりよい医療サービスを提供すれば、日本における薬剤師の社会的評価もあがり、患者さんのための医療の向上へも繋がっていくと思います。

今回FAPA学術大会への参加の機会を与えてくれた日本薬剤師会の皆様には感謝しています。

マレーシアナイトの様子
※次回大会は2014年にマレーシアのコタキナバルで開催予定。次回大会の広報のため、マレーシア薬剤師会の主催によりマレーシアナイトが実施された。

ガラディナー（晩餐会）の様子
※ディナー後半には、参加者が国毎に舞台に上がり、歌や踊りを披露し盛り上がる。日本チームは、薬学生・薬剤師一体となって「花」を熱唱！

# 日本薬学生連盟九州支部立ち上げイベントを開催！

参加者・スタッフ集合写真

## ◆ごあいさつ

こんにちは。長崎国際大学の士野貴雅です。2012年12月16日に、日本薬学生連盟九州支部立ち上げのイベントを行いました。今回は、九州支部の支部長に就任予定の私が内容をお伝えさせていただきます。

## ◆支部立ち上げの経緯

現在、当団体の支部制は関東と関西で導入されており、この二つの地域は他の地域と比べて薬学部の数も多く、大学同士のアクセスが良いなどの理由から、薬学生同士が“繋がれる”ネットワークが形成されています。このネットワークの自発的な形成は九州など他の地域では、インカレサークルに所属していても、難しいことがあります。

だからこそ、今回は九州で唯一日本薬学生連盟に団体加盟をしているサークルNILS（長崎国際大学）と、九州の個人会員の学生、地域連携委員会が協力し合い、自分たちで薬学生同士が“繋がれる”ネットワークを作ろうと発案し、今回このイベントを開催しました。

今回のイベントは福岡県福岡市で行いました。九州の薬学生のみならず、医学部生も参加者としてお越し頂きました。

## ◆イベントの内容

初めに、当団体の説明を石破佳永子さん（東京理科大学4年）からしていただき、私自身から九州支部の立ち上げ（当時は「設立希望」の段階でしたので、あえて「立ち上げ」と表現しております）に対する思いを述べさせていただきました。

アイスブレイクでは、5年生の薬局実習に実際にプログラミングの一環として行われたものを低学年、及び、他学部の学生に体験して頂きました。これは、薬局やドラッグストアへ来店された方への医薬品の選択の提案及び、そのエビデンスについて、皆で考え（この際に学年と学部が混ざるように組みました）、他の参加者との交流を図りながらプログラミングの早期体験を行って頂きました。

メインのワークショップは『九州支部が設立したら、どんなイベントをしたいか？』というテーマで、各グループが思い思いにイベントの企画を練りました。まず、4グループに分かれて、自分たちが興味・関心を持っていることを話した後、グループのメンバーを入れ替えて多方面から意見を出し合いました。

その後、元のグループに戻って、各グループがそれぞれ春・夏・秋・冬のイベント企画を担当し、数多くの意見が飛び交う中から1つないし2つを、イベントの企画として選び、前半と後半の時間を設け、それぞれについてアイディアを膨らませました。

全体発表では、行いたいイベント案として

「春」担当グループ　・他医療系団体との勉強会や交流会（新入生歓迎会のようなもの）
「夏」担当グループ　・医療系学生、他分野の学生と理想の病院を考える　・製薬企業の見学・報告会
「秋」担当グループ　・大運動会　・キャンプ
「冬」担当グループ　・CBT意識づけの勉強会（低学年対象）

が挙がりました。

九州の薬学生の中には、他学部との交流を盛んに行っている学生も多く、上記の意見にも他学部との協力や参加を視野に入れた意見が多く見られました。

最終的にこれら春夏秋冬のグループの意見を組み合わせて、私たち九州支部の2013年度の年間イベント計画表としました。既に動き出している企画もあり、私自身これからの九州での薬学生のイベントがとても楽しみです。

今回参加していただいた長崎国際大学、九州大学、長崎大学、熊本大学、崇城大学、第一薬科大学の学生の皆様、お越しいただき本当にありがとうございました。

## ◆今後の抱負

終わりに、このイベントを通じて、九州には活動に意欲的な学生や主体的で強い意志を持った学生が多くいること、また自分の周りには手伝ってくれる仲間がいることを改めて感じました。これから、九州支部長に就任させていただくことになりますが、この仲間たちと一緒に、九州での薬学生の活動を大いに盛り上げていきたいと思います。また、イベントは「参加してくれた皆が楽しめる」を大前提に、知識やスキルを参加者が毎回持って帰ることが出来ることを心がけていきたいと考えています。

次は、貴方が加わってみませんか？

文責：日本薬学生連盟会員
長崎国際大学5年　士野貴雅

士野も参加者として発表に加わる（写真右）

各グループの話し合いの様子

和気藹々とした雰囲気の中での意見交換

# アジアの薬学生とこの夏一番のエキサイティングな7日間を！

## ──いよいよ8月に千葉でAPPSが開催──

アジア太平洋薬学生シンポジウム（APPS）のレジストが4月1日から開始されます！

APPSとはアジアの薬学生による500人規模の国際会議のことです。APPSは年に一度アジアの国で開催され、薬学生の国際的な協力を創り出すことを目的として各国の薬学教育に関する情報や意見を交換します。会議だけでなく、楽しいイベントも開催されます。各国の薬学生と真剣に薬学教育について考え、イベントで交流するという夢のような一週間を過ごすことができること間違いなしです。また、各国のリーダー育成を目的としたLIT（Leader in Training）や観光を目的としたPST（Post Symposium Tour）も開催されます。

日本と海外の薬学にはどんな違いがあるのだろう？　英語で自分のコミュニケーション能力を試してみたい！海外の薬学事情に興味があるけど、留学するのは不安…。日本にいながらにして海外の薬学生と交流できたら…。

☆そんなあなたに朗報です☆ 2013年8月22日（木）～28日（水）になんと日本でAPPSが開催されます！もちろん多くのアジア各国の薬学生たちが日本へやってきてくれます。大学では学べないいろいろな情報や経験を得るだけでなく、海外にたくさんの友達を作ることのできるまたとないチャンスです。この夏、APPSに参加することであなたの中の何かが変わります！

薬学生である今しかできないことがあります。さぁ、私たちと一緒にAPPSを通して薬学生生活で最高の思い出と素晴らしい仲間を作りませんか？みなさんの参加をお待ちしております！

| | |
|---|---|
| 開催日 | 2013年8月22日（木）～28日（水） |
| 参加費（6泊7日） | 日本薬学生連盟会員￥40,000<br>非会員￥45,000 |
| 会場 | 東邦大学、<br>アパホテル東京ベイ幕張（兼宿泊先） |
| レジスト期間 | 2013年4月1日～6月30日 |
| 主催 | 日本薬学生連盟 |
| 後援 | 日本政府観光局、日本製薬工業協会、日本病院薬剤師会、日本薬学会、日本薬剤師会、IPSF、APRO |

詳しくはこちら　HP: http://www.apps2013.jp